真理を発見する装置

—— Habermas社会理論におけるコミュニケーションの役割 ——

A Device to Discover the Truth:

The Role of Communication in Habermas's Social Theory

伊藤 賢一

ITO Kenichi

Much attention has been paid recently to the social theory of Jürgen Habermas. However, it has also attracted strong criticisms from broader academic fields. One of the criticisms comes from feminism theorists, focusing on his ideally proposed conception of public sphere.

This paper examines Nancy Fraser's criticism as a typical example to point out that she may be underestimating the power in Habermas's social theory. Although most of her commentaries make sense, they nevertheless tend to overlook the role of communication (or discourse) in his theory, which operates as a device for discovering (or to approaching) the truth.

1. はじめに

Habermasの社会理論が英語圏に知られるようになるにつれて、多方面からの批判も出てくるようになった。それも社会学だけでなく、哲学的正義論や道徳・政治哲学・教育学・歴史学・メディア論といった多方面から様々に批判されるようになってきている（最近のものとしては、White (ed.) [1995]、Deflem (ed.) [1996]、ジェイ（編）[1997] など）。その中でも、フェミニズムからの反応は無視できないものである。というのは、フェミニズムからの既存学問批判がそうであったのと同じく、その批判がラディカルで徹底しているからである。

本稿は、そうした批判の典型的なものとしてNancy Fraserのものをとりあげる。特にFraserの議論をとりあげるのは、彼女の議論が明晰で的確であるだけでなく、多くのフェミニストからの批判に共通する、重要な論点を含んでいるからでもある⁽¹⁾。Habermasの議論は現在も発展過程にあり、こうした批判を部分的に取り入れる形で修正がなされているが、Fraserらの批判は依然として有効性を無くしてはいない。特に批判の集中しているブルジョア公共圏（Öffentlichkeit / public sphere）⁽²⁾の理念がそれ自体理想的なものでありうるのか否か、またディスクルス（討議）・話し合いといった形の社会過程が、公論や意見形成においていかなる役割を果たしているのか、不平等や差別の解消に本当に役立つものであり得るのか、といった批判は核心をついている。これらの問題は確かに再検討されるべきものであろう。

にもかかわらず、こうした批判が見落としている論点もあると思われる。それは、Habermas理論においてコミュニケーション（あるいはディスクルス）が果たすとされている役割、すなわち、真理を発見する装置としての、より正確には真理（正義）に接近する装置としてのそれである。このことを見落とすと、Habermas理論がもつ規範理論としての価値を過小評価するだけでなく、ヘゲモニー論が切り開く相対主義の陥穽にはまる危険も

あることを、以下の議論で示そうと思う。

2. FraserのHabermas批判

Fraser [1992] は、公共圏という一般的概念は批判理論にとって不可欠のものだとしつつも、Habermasが定式化したような公共圏の概念では必ずしも満足できない、として批判を展開している。彼女の見たところ、Habermasの『公共性の構造転換』[1962=19873]の目的は、ブルジョア公共圏を可能にした条件を探り、その退行を描くことである。ここでのHabermasの議論によると、20世紀後半の「福祉国家のマス・デモクラシー」においてはブルジョア公共圏ないしリベラル公共圏は存立することが不可能となる。しかしFraserは、Habermasが公共圏のブルジョア・モデルが依拠している「曖昧な前提のいくつかを明確に問題化」しないまま、その一方で「新しいポストブルジョア的な公共圏のモデルを展開する前で立ち止まっている」のは奇妙なことだ [Fraser, 1992: 111] という。

Habermasが導入したブルジョア公共圏の概念は、18世紀から19世紀のブルジョアジーの自己理解から抽出されたものである。Habermas自身、ここで表明されている公共圏が当時のブルジョアジーの間で実現されていたと主張しているわけではない。しかしそれは、単なる自己正当化の言説という以上のものであり、ひとつの規範的理念として現実社会を照らしだす鏡のようなものとして導入されている。Fraserも、公共圏が政治的支配を合理化する制度的メカニズムとして作用したことは認めている。すなわち、あるレベルでは国家を、市民に対する説明責任を負った (accountable) ものにし、別のレベルでは、ある種の討議的な相互行為を指示するものであった。また、公共圏概念のもつ歴史的限界をもFraserは認識している。Habermasが言うように、「公共圏のブルジョア的観念のユートピア的潜在力が十分に実現されたことはなかった。特に誰にでも開かれた参加、という要請は不十分であった」 [Fraser, 1992: 113]。

Habermasは、公共圏が機能するには社会と国家が分離していることが重要な前提と考えている。ところが、ブルジョアジー以外の層が政治過程に参加するようになると、この前提は崩れてくる。「福祉国家型のマス・デモクラシーが登場し、社会と国家は相互に介入するようになる。国家を批判的に監視するという意味での公開性は、宣伝活動 (PR)、マスメディアを通じた陳列、公論の製作と操作に道を譲ってしまった」 [Fraser, 1992: 113]。こうして不十分ながら規範たりうる理念として登場した公共圏が、社会・経済的条件の変化とともにその場所を失っていく、というのがHabermasの描いた全体のストーリーである。

最近では特に社会史の研究からこうした見方に対する修正が起きている。Fraserが列挙しているところによれば、Landes, Ryan, Eleyらの研究によって明らかにされたのは、公的な公共圏は注目すべき排除 (exclusions) に依存しており、むしろこうした排除によって構成されていたことである。Landes [1988] によれば、フランスにおける共和派の公共圏は女性的なサロン文化に対抗する形で登場しており、「合理的」で「高貴」で「男らしい」スタイルが奨励された、という。Eley [1992] はイギリスとドイツにおいても同様に、リベラルな公共圏を構成していたクラブやアソシエーションは決して誰にでも開かれていたのではなく、「普遍的階級」であり統治するのにふさわしい者として自己主張しようとしていたブルジョアジー男性のみの排他的なものであったことを論じている。それゆえ、

そこで論じられた言説はBourdieuのいう意味での卓越化（distinction）の戦略として捉える必要がある。つまり、市民社会や連帯した公共圏の文化がもつ卓越性の主張は、額面通りには受け取れない [Fraser, 1992: 114-115] というのである。

ここに、公共圏の勃興に関するHabermasの説明が十分な評価を誤っている、注目すべきアイロニーがある。公開性、合理性、社会的地位ハイアラーキーの一時停止といったことを大げさに宣伝している公共性の言説は、それ自身卓越化の戦略として展開しているのである。[Fraser, 1992: 115]

またHabermasはリベラルな公共圏モデルを理想化しているだけでなく、それ以外の公共圏をも見ようとしない。Ryan [1992] の研究は、公式の公共圏からは排除されていた19世紀北米の女性が、公的な政治生活にアクセスする独自のルートを作っていたことを示している。したがって「女性は公共圏から締め出されていた」という見方も、Fraserによれば、ブルジョア公共圏こそが唯一の公共圏であるという主張を額面通りに受け入れている点でイデオロギー的なものとされるのである。しかしながら実際は、ブルジョア公共圏だけが唯一の公共圏（the public）であったわけではないことを、Ryanらの研究は示している。むしろその反対に、ブルジョア公共圏の成立とほとんど同時に「互いに競合しあう多数の対抗公共圏（counterpublics）」が簇生している。「国家主義者の公共圏、人民・農民的公共圏、エリート女性の公共圏、労働階級公共圏が成立していたのだ。したがって、各公共圏がせめぎ合うという事態は、Habermasが言うように、19世紀の終わりや20世紀になってはじめて現れたものではない」[Fraser, 1992: 116]。

このような見方は、Habermasの提示した公共圏の理念そのものに疑いを差し挟むものである。つまり、公共圏の理念そのものが規範としての位置を確保しうるかどうかという問題を提示しているのである。ブルジョア的公共圏の理念は「実現されなかったユートピア」であるのか、それとも「ある階級支配の形態を正当化する機能を果たした、男権主義的なイデオロギー的観念」であるのか。Eleyは後者の立場をとっており、「公式のブルジョア公共圏は、政治支配の性質を歴史的に大きく転換するのに貢献した制度的手段である。つまり公共圏は、抑圧的モードの支配からヘゲモニー的なそれへ、より優越した力の獲得に基づく支配から、何らかの抑圧手段による合意に基づいた支配へ、という転換を導いたのである」。しかし注意しなければならないのは、Fraserはこの見方に全面的に賛成しているわけではない、ということである。この解釈はFraserから見ても「極端すぎ、柔軟性のない」ものである。ブルジョア公共圏のイデオロギー性を指摘して、これを放棄することにはFraser自身も反対している [Fraser, 1992: 117]。

その代わりにFraserが問題としているのは、Habermasが描くブルジョア公共圏が前提にしている次の四つの点である。第一に、公共圏に参加した発話者には、地位の違いを括弧に入れて、あたかも社会的平等者であるかのように議論することが可能だ、という前提。この前提に従えば、社会的平等は、政治的デモクラシーの必要条件ではない、ということになる。第二に、競合する公共圏の数が増えていくことは、デモクラシーを促進するのではなく必然的にそこから遠ざかることになり、したがって常に複数の公共圏よりも単一の総合的公共圏の方が望ましい、という前提。第三に、公共圏での話し合いは、公的な・共通の問題の審議に限定されるべきであり、私的利害・私的 이슈が登場するのは望まし

くない、という前提。第四に、民主的公共圏が機能するためには市民社会と国家がはっきりと分かれていなければならない、という前提 [Fraser, 1992: 117-118] である。Fraserはこの四つの前提それぞれについて、その妥当性を検討しており、いずれの前提も疑わしいものとして退けている。

第一に、コミュニケーションの地平は決して透明なものではなく、権力関係に彩られている。フェミニズムの研究が明らかにしたように、男性の方が女性の発話により頻繁に介入する傾向があり、女性の介入はしばしば無視され、男性の方が長く話す傾向がある。またコミュニケーション弱者は、自らの思考をあらわす正しい声や言葉を持ち合わせていないことも多い。「話し合い (deliberation)」はしばしば「支配」の言い換え、という側面をもっている。政治制度は自律的だ、とりべらるは考えることが多いが、実際には自律していないことがわかる。政治的デモクラシーが要求しているのは、実質的な社会的平等なのである [Fraser, 1992: 118-121]。それゆえむしろ、平等な話し合い・議論の空間を実現するためにこそ、社会的平等を目指さなければならない、という要請が生じる。Fraserにとって、社会的平等は公共圏における議論の結果ではなく、むしろ前提条件である。

第二に、Habermasは公共圏をひとつに制限しようとしており、別の公共圏が現れるとそれは公共圏の「断片化」として衰退の印と見なしているが、これは根拠のないものである。前述のように、抑圧されている者は自分たちの主張をするための場所を確保すること自体が困難である。女性・労働者・有色人種・同性愛者といった被抑圧階級・集団にとって対抗的公共圏を作ることがメリットをもたらすことは、歴史的研究が繰り返し発見していることである。例えばフェミニズム運動が、「性差別 (sexism)」「セクシュアル・ハラスメント (sexual harassment)」等々といった抑圧状況を表現するコトバをつくり出したことを考えてみれば、対抗的公共圏の形成が不平等・差別の解消といった目的に有効であることが理解できよう。もちろん、非民主的で差別的な対抗公共圏もありうるし、民主的・平等主義的な対抗公共圏もインフォーマルな排除や境界維持を克服できないこともある。それでもFraserは、階層社会と多文化社会の両方を想定した思考実験を行い、いずれの場合も単一の公共圏よりも複数の公共圏が存在した方が望ましい、という結論を導いている [Fraser, 1992: 121-128]。

第三に、公共の事項として何を話し合うべきかは話し合いに先立って事前に決定することはできない。「たとえば、ごく最近まで、女性に対する家庭内暴力を共通の問題と考え、公共のディスクリスにふさわしいトピックであるとする点でフェミニストは少数派であった。大部分の人々は、この問題は極めて少数の異性カップル間（と、おそらくこうした問題を扱うことになっている社会的・法律的専門家）の私的な事柄だと考えていた」 [Fraser, 1992: 129]。しかしフェミニズム運動の結果、家庭内での問題も公的な問題である、と考えられるようになったことは記憶に新しいであろう。重要なのは、何が公的問題で何が私的問題か、という判断の基準そのものが人々の意識において変化している、ということである。それゆえ、公共圏で話し合うべきトピックをあらかじめ制限することは、公共圏の機能を妨げることはあっても、それを促進することはないのである [Fraser, 1992: 128-132]。

第四に、市民社会 (civil society) を、国家の介入を受けない資本主義経済ではなく、経済的でも行政的でもない人々のつながり、と考えた場合、議会政治をどのように扱うかが

問題となる。Fraserは意見形成のみに関わる公共圏を「弱い公共圏 (weak publics)」、議会政治のように意思決定まで引き受ける公共圏を「強い公共圏 (strong publics)」と命名しているが、このように考えると公論を政治的な意思決定に結びつけることができる議会政治は公共圏の力を強めているとも言えることになる。したがって、国家と市民社会との分離が本当に公共圏の成立にとって不可欠であるかどうかは、議会（政府）とその外部の公共圏との関係を再考しなければ論じられない問題である、としている。

以上の議論を通じてFraserが提案しているのは、互いに競合しあう複数の公共圏を構想することである。このような構想のメリットは、自らの思考や利害を表明することが困難なコミュニケーション弱者にとって存在領域を確保できる可能性があることと、あらかじめ公共圏で扱う問題を限定してしまうことを回避しやすくなることであろう。Fraserの主張はもっぱらフェミニズムの立場からなされているというわけではないが、この見解の背後にはフェミニズム研究によって明らかにされた知見が生かされているといえる⁽³⁾。

3. 競合する公共圏のネットワーク

Fraserによる批判は妥当な論点を多く含んでいるが、1962年に書かれた『公共性の構造転換』を対象としたものであり、現在のHabermas理論とは相違点も多い。Habermasは『公共性の構造転換』90年版の「序言」[1990=1994]や『事実性と妥当性』[1992=1996]において、上述したような自らに対する批判を一部受け入れて、複数の公共圏からなるコミュニケーションのネットワークを構想している。Fraserの批判の問題点を指摘する前に、現在のHabermas理論の到達点を確認しておくことも必要なプロセスであろう。

Habermasは『事実性と妥当性』第八章で、Petersのモデルを使いながら、中心 - 周縁の軸に沿って配置され、水門 (Schleuse) システムによって構造化されているコミュニケーションのシステムを記述している。政治システムの中核領域は、行政府、司法システム、民主的意見・意思形成という制度的複合体からなり、この中心は、形式的な意思決定権力と実際的な特権とで周縁からは区別されている。行政の周辺では、国家によって委任され、権利と自治あるいは監督・立法機能を持ったさまざまな制度（大学・公的保険制度・専門家団体・慈善組織・基金等々）から、ある種の内的周縁が発達している。そして、中核領域全体の外には、大雑把に言えば、「消費者」と「生産者」からなる外的周縁がある。そして明確に定義された集団の利害を代表する団体や、政党政治の団体、「公的利益」を主張する団体、協会、慈善機関等々といったさまざまなネットワークがある種の公的調整を行っている。このような意見形成団体は、マスメディアに支配された公共圏における市民社会の下部構造の一部、とされている [Habermas, 1992: 429-431]。

Petersの議論に依拠しながら、Habermasは意思決定に関するコミュニケーションの流れを提示している。ここで注目されるのは「水門モデル」と呼ばれるもので、拘束力をもつ決定は、法手続きの形で定められた中核領域の狭い水路を通らなければならない。この水門はどのようなものでも通れる訳ではないにしても、手続的にしか決定されていないのでこのプロセスの方向とダイナミクスを、限られた範囲でのみコントロールするに過ぎない。結局、具体的なコミュニケーションと意思決定のありかたは、周縁に位置している公共圏が特定の 이슈を「問題化 (Problematization)」することができるか否か、ということにかかっている、というわけである [Habermas, 1992: 431-433]。

それでは、公共圏はHabermasによってどのようなものと考えられているのであろうか。Habermas [1992: 435-438] によると公共圏は、「社会秩序」という通常の社会学的概念では捉えられない。これは、制度ではないし、組織でもない。公共圏は、「内的には境界を設定することもできるとはいうものの、外的には、開かれた・浸透性の・移動する地平によって特徴づけられる」。公共圏は、「コミュニケーションを交わす情報と視点のネットワークとして描写するのが最善である」。そのプロセスにおいて、「コミュニケーションの流れは、テーマごとに特定化された公論の束となるように、フィルターにかけられ、統合される」。このように、Habermasにとっての公共圏は、Fraserが想定するものよりも抽象的な概念となっている。それは、特定の利害団体や社会運動のような実体的な人々の範囲と重なるものではなく、むしろ特定のテーマごとにそのつど現れては消えていくような何物かである。

ここでHabermasが照準を当てているのは、意思決定に結びつけられた公的な意見形成のプロセスである。「公共圏において、束ねられた意見を公論にするものは、論争的な方法と承認である。公論は、統計学的な代表ではないし、世論調査によって発見されるようなものでもない」のである。ブルジョア公共圏の自己理解においてそうであったように、人々の意見交換こそが公共圏を構成する実質とされている。「公共のコミュニケーションを通じて得られる政治的影響力は、究極的には共鳴に、それも、平等主義的に構成されている素人の承認に依存しているのである。…公的なオーディエンス (Publikum)こそが最終的な権威なのだ。というのは、このオーディエンスこそが、行為者が登場する公共圏の内的構造を構成しているからである」。もちろんFraserが記述しているように、われわれの言説空間は「権力」とは無縁ではないし、「理想的発話状態」からは程遠い。例えば、大規模でよく組織された利益集団があつて、公共圏に戦略的に影響を与えようとする場合も頻繁にある。公論が操作されうることばHabermasも認めている。しかし密かに貨幣や組織的権力を導入することによって「公論が操作されることはあつても、公的に買収されたり、脅迫されたりすることはない」[Habermas, 1992: 440-441] のである。

要するに、HabermasはFraserのこのような多様な公共圏の概念を半分だけ認めていると言えよう。すなわち、日常的コミュニケーションのプロセスにおいて特定の問題・イシューをめぐる行われる意見の交換そのものがすでにゆるやかな公共圏を形成している。それは、ある特定の参加資格を得たものだけが参加できるような会合や集会のようなものではなく、もっと日常的な通常の言葉のやりとりをも射程に含めたものである。その意味で、Fraserのいうようにブルジョア公共圏の概念は拡張され、さまざまな場面をその中を含むようになったといえる。しかし、Habermasもすべては譲らない。それは、Fraserの図式とは異なりテーマごとに抽象的に設定されているそれぞれのネットワークが互いに結びつき、全体として一つの公共圏を作っているという主張である。つまり、さまざまな利害団体や運動体がせめぎ合うのではなく、網の目のように張りめぐらされたコミュニケーションのネットワークの中で、特定のテーマ・イシューが「問題化」され、中心の「水路」を通じて全体の意思決定に影響する、というシナリオなのである。Fraserの議論とは関心の焦点が異なるので当然のことではあるが、Habermasの議論はあくまでも意思決定（法制定）をいかに民主的にコントロールするか、という問題に集中しており、全体としての公共圏という想定は不可欠なのである。もちろん、だからといってFraserのいう多様な公共圏

(話し合いの空間)が不必要ということにはならない。むしろ、Habermasの立場からすれば、あらゆる立場から声をあげうるといことは、法制定の正義を保証する必要条件として要請されているといえる。

さまざまな団体によって組織される意見形成が責任ある決定につながれば、それは協力しあって真理を探究するという目標を達成できる。ただし、それが可能であるのは、こうした意見形成のなかに、それを取り囲んでいる政治的コミュニケーションのなかで自由に漂っているさまざまな価値、主題、論稿、論拠が入り込めるものであり続ける場合に限られる。こうした意見形成は基本的な権利として実現されなければならない。しかし、全面的に組織することはできない。…そのさい、コミュニケーションの流れといっても、…意思決定ではなく発見と問題解決のための、その意味で非組織的な公共圏のコミュニケーションの流れなのである。[Habermas, 1990=1994: xxxv]

このように、Fraserのいう「強い公共圏／弱い公共圏」という想定は、それとは違う文脈からではあるが、「組織された公共圏／組織されない公共圏」として取り込まれているのである。

4. コミュニケーションの役割：真理を発見する装置

Eleyのように公共圏の理念そのものが卓越化戦略の産物であり、イデオロギーの言い換えだという立場をFraserはとっていない。多岐にわたる彼女のHabermas批判をまとめると、(1) 公共圏におけるコミュニケーションの透明性、(2) 公共圏の単一性、(3) 公共圏での 이슈の限定性、(4) 国家と社会の分離の不可欠性、という四点に対する疑義であった。上述したように、Habermasはある程度この批判に応える形で理論を発展させており、「組織された公共圏／組織されない公共圏」という図式は(2)～(4)の批判をある程度受け入れたもの、と解釈することも可能であろう⁽⁴⁾。

しかし(1)のコミュニケーションの透明性に関しては、Habermasはその主張を貫いている。実際、Habermasが彼の社会理論の中核に想定しているコミュニケーション（より狭義には討議Diskurs）の概念は、半ば超越論的に想定されているものである。現実のコミュニケーションや議論、意見形成・意志決定の過程がどんなに「権力」に歪められたものであっても、あるいは、どんなに排除や抑圧といった不正義に彩られたものであっても、根源的に想定されたこの概念を批判したことにはならない。むしろ現実がそのように歪められているからこそ、理想的なコミュニケーションがその重要性を増してくるのである。Habermasにとってこの概念は、抑圧された社会において認識の真理性をいかにして確保するか、という批判理論が抱え込まざるを得ないアポリアに対処するために戦略的に採用された理論装置でもある⁽⁵⁾。

コミュニケーション的行為という概念を導入すると、各行為者の間に言語的理解に基づいたある秩序が成立する。理解に基づいた秩序というこのモデルは、Habermasが構築しようとしている社会理論にとっていくつかのメリットをもたらすものである。各行為者間の行為計画の調整は、相互に話し合うことによって（ある程度まで）可能になる。その際、決定的に重要なのは、各行為者がそれぞれ妥当要求（Geltungsanspruch）を掲げあい批判可能な空間を形成する契機である。各行為者はこのコミュニケーション的行為の集積によ

って共通の世界解釈を作り上げ、妥当する社会的規範や信頼しうる人格といった資源を再生産しているのである [Habermas, 1981=1987 (下) : 44]。

ここで重要なのは、相互に調整が可能になるということだけではない。彼がこの概念に託している役割は「ローカルな合意を超えて、真理を発見する」可能性である。もちろん、現実のコミュニケーションにおいては、特定の発話者同士が特定の文脈において限定された内容について合意することを目指すものである。「いまここで」掲げられた発話の妥当要求が「相互主観的に承認・受容」されたとしても、それはせいぜい「イエス／ノーの態度決定についての基準、つまり特定の解釈者共同体において確立されているそれ」が更新されたことを示しているに過ぎない。しかしここで決定的に重要なのは、妥当要求にはこうしたローカルな合意を越える「理想化する力」が組みこまれていることである。われわれが発言において要求している妥当性は「われわれ当事者の間でだけ通用する真理」ではなく、普遍的に通用するような何ものかである。言い換えれば、そうした限定的な基準が絶えざる問い返しにさらされる可能性が開かれているということである [Habermas, 1992: 30-31]。コミュニケーションに伴ってそれまで無意識のうちに自明と考えられてきたさまざまな前提は、繰り返し批判的吟味にさらされる。それゆえ、Habermas理論においてコミュニケーションという装置は、真理を発見するものとしての役割を担っている。もちろん、各参加者はコミュニケーションの場において必ず真理に到達できるというわけではなく、双方が真摯に話し合っただけで誤った結論を導き出す可能性は原理的に排除できない。しかし、ある行為者や団体・組織が単独で物事を決定し遂行していくような、批判可能性を排除した状態を想定してみれば、見解や決定の批判可能性を原理的に確保しているコミュニケーションは必ず真理をもたらすわけではないにしても、それに少しでも近づく（可能性をもたらす）装置として設定されていることが理解できよう⁽⁶⁾。

したがって、公共圏というコミュニケーションのネットワークにおいて、特定の 이슈が「問題化」テストをくぐり抜けていくことは、その 이슈にそれなりの説得力があり、「公共の問題」にふさわしいと人々に考えさせる何物かを含んでいることを間接的に証明していることになる。いわば、市民社会全体が共同で真理を探究するコミュニケーション共同体として考えられているのである。

したがって、この見解は「ヘゲモニーを巡る闘争」というビジョンとは両立しうるものの、決定的に異なるものである。もしFraserのHabermas批判から、コミュニケーションを権力過程としてのみ捉えるならば、Habermasの議論がもっている中心的な意義を見落とすことになる。例えば阿部 [1998] は、Fraserの議論がヘゲモニー的なコミュニケーション観を導いていると解釈している。

ヘゲモニーの問題意識がなげかけていることは、「フーコー的な意味での排除」の有無ではなく、法的・形式的な「排除」が存在しないにもかかわらず、なにゆえに「合意」を通じて支配／従属関係が形成されるのかという権力メカニズムの問題に他ならない。ブルジョアジーを担い手としたリベラル・モデルを中心に、「単一的・包括的なもの」として語られるハーバーマスの公共圏議論に対して、「様々な対抗的公衆を担い手とした多元的な公共圏」の必要性を主張するフレイザーの議論の意義は、公共圏に潜むヘゲモニー的な権力メカニズムの側面を認識してはじめて十分に理解可能なものとなる [阿部, 1998: 237]。

Fraserの提起した、コミュニケーションの透明性に対する疑いは、確かにヘゲモニー論的な想定を前提にしている。このことは、現実のコミュニケーションについての経験的研究を踏まえたものだ。この批判は、Habermasがコミュニケーションの場である「生活世界」を「権力」と切り離された透明な空間という「フィクション」として描いてしまう、というHonneth [1985=1992] の批判とも共通するものである。ここから要請されるのは、表向きは「合意」を目指して自由に話し合う空間であるかのように見えながら、実際にはコミュニケーション構造が「権力作用」によって歪められているのではないか、という疑いをもちつつ、事態を解明することである。

こうした見方は、確かに「公共圏」の現状分析として妥当なものであろう。家族関の話し合いや小規模な会議から、国政レベルの世論形成に至るまで、われわれはもはやコミュニケーションや議論の透明性を信じてはいない。しかしながら、もっぱらヘゲモニーの行方を、「権力作用」のみを追い求める事は危険なことである。コミュニケーションにおける「合意」を「権力関係」の結果としか見ないのであれば、Habermasの中心的な主張であるコミュニケーションと真理との結びつきは否定されることになる。ある 이슈が公共圏による「問題化」テストをくぐり抜けたとしても、それはその主張をした特定のアクターがうまくPRしたとか、権力を持っていたから、として処理されてしまう。こうした見方は確かに現実の世論形成過程を分析するには有力なパラダイムとなりうるかもしれないが、Habermasの主張する規範的理念としての公共圏の価値を損なうことにもつながるのである。むしろ規範的な鏡として「透明なコミュニケーション」という想定があるからこそ、ヘゲモニー論がそれとして意味を持ちうる事を、われわれは銘記しておくべきであろう。

さらに、ヘゲモニー論はそのまま拡張していけば、自らを積極的な「真理」として主張する土台を掘り崩してしまう恐れがある。すなわち、ヘゲモニー的な見解そのものが有力に見えるのは、それが真理であるからではなく、主張者が何らかの権力をもっているからにすぎない、という自己矛盾の危険である。フェミニズム運動の結果「家庭内での夫の暴力」は「私的なことがら」ではなく、「公的に議論すべきことがら」と思われるようになったが、それは運動が功を奏し、フェミニズム陣営が言説空間において権力を振るうことが可能になったからではなく、むしろこの主張自体に説得力があったからに他ならない。われわれの生きているコミュニケーション空間はまったく透明ではないにしても、光が全然通らないわけではないのだ。

もちろん、「世論形成」や「意思決定」のプロセスについて実証的に研究することの意義は損なわれない。公的な議論の文字通りの意味とは別の解釈可能性を、われわれとしても否定するつもりはない。ただ、文字通りの議論そのものには二次的な意義しかないとか、あるいは積極的な意義は全くない、といった止めどもないシニシズムの危険は常に意識しておく必要がある。それは、このような権力政治観が、そもそもの実証的研究を支える規範的基準を彫り崩してしまうという陥穽をもたらすだけでなく、一行為者としてのわれわれの政治文化に及ぼす価値的影響（ニヒリズム・政治的無関心）をも必然的に惹起するからである。

註

- (1) FraserのHabermas批判としては、Fraser [1985=1997] が全面的批判を展開しているが、本稿の考え

る最も決定的な論点はむしろFraser [1992] が展開しているので、こちらを取り上げる。尚、Fraser [1985=1997] に関しては、Cohen [1992/95] も参照の事。

- (2) Habermas [1962] の邦訳ではÖffentlichkeit の訳語は「公共性」であるが、本稿では花田 [1993] が指摘している通り、「公共圏」の方が相応しいと考えるのでこちらを用いる。ただ、書名だけは『公共性の構造転換』のままとしている。
- (3) 本稿の主題とは若干離れるが、Fraser [1985=1997] で問題とされているのは、Habermasの社会理論が社会を「システムと生活世界」の二つに分け、もっぱらシステムからの介入のみを想定していることである。この枠組みは性差別を問題にするには不適切であるだけでなく、生活世界内部を「権力」とは無縁の空間として不問にし男性支配を温存させるイデオロギー的な側面をもつ、と批判されている。
- (4) 「ある程度」というのは、Habermasが「組織されない公共圏」という想定をすることで、2) 一枚岩的でない様々な領域からなり、3) あらかじめイシューが限定されておらず、4) 国家とは独立した公共圏 (= 社会) を想定しており、Fraserの批判を回避していると解釈できるからである。
- (5) 批判理論の抱えるアポリアとHabermasにおけるコミュニケーションの関係については、[伊藤, 1996] で既述してある。
- (6) そしてこの点がHabermas理論の評価すべきポイントであることは、Fraser [1985=1997] , Cohen [1992/1995] , Benhabib [1992] らが一致して強調している。

文献

- 阿部潔, 1998, 『公共圏とコミュニケーション — 批判的研究の新たな地平』, ミネルヴァ書房.
- Benhabib, S., 1992, “Models of Public Space: Hannah Arendt, the Liberal Tradition, and Jürgen Habermas,” in: Calhoun(ed.), *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press, pp. 73-98.
- Cohen, J., 1992, “The Historicist Critique,” Cohen, J. and Arato, A.(eds.), *Civil Society and Political Theory*, MIT press, pp. 201-254. /1995, reprinted as “Critical Social Theory and Feminist Critiques: The Debate with Jürgen Habermas,” in: Meehan (ed.), *Feminists Read Habermas: Gendering the Subject of Discourse*, Routledge, pp. 57-90.
- Deflem, M. (ed.), 1996, *Habermas, Modernity and Law*, Sage.
- 江原由美子, 1993, 「自己定義権と自己決定権 — 脱植民地化としてのフェミニズム」, 『岩波講座 社会科学の方法VIII システムと生活世界』, 岩波書店, pp. 159-200.
- Eley, G., 1992, “Nations, Publics, and Political Cultures: Placing Habermas In the Nineteenth Century,” in: Calhoun (ed.), *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press, pp. 289-339.
- Fraser, N., 1985, “What’s Critical About Critical Theory? The Case of Habermas and Gender,” *New German Critique*, No. 35 (Spring/Summer 1985), pp. 97-131. = 1997, 永井務訳, 「批判理論を批判する — ハーバーマスとジェンダーの場合」, 竹内真澄監訳, 『ハーバーマスとアメリカ・フランクフルト学派』, 青木書店, pp. 123-170.
- , 1992, “Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy,” in: Calhoun(ed.), *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press, pp. 109-142.
- 藤原保信・三島憲一・木前利秋編, 1987, 『ハーバーマスと現代』, 新評論.
- 藤澤賢一郎, 1989, 「ハーバーマスの真理論」, 『フランクフルト学派再考』, 弘文堂.
- Habermas, J., 1962, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied. = 1973, 細谷貞雄訳, 『公共性の構造転換』, 未来社.
- , 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 2Bd., Suhrkamp. = 1985/86/87, 平井俊彦・フーブリヒト・河上倫逸・徳永恂・脇圭平他訳, 『コミュニケーション的行為の理論 上・中・下』, 未来社.
- , 1983, *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, Suhrkamp, = 1990, 三島憲一・中野敏男・木前利秋訳, 『道徳意識とコミュニケーション的行為』, 岩波書店.

- , 1988, *Nachmetaphysisches Denken: Philosophische Aufsätze*, Suhrkamp. = 1990, 藤沢賢一郎・忽那敬三訳, 『ポスト形而上学の思想』, 未来社.
- , 1990, “Vorwort zur Neuauflage 1990,” in: *Strukturwandel der Öffentlichkeit* (Auflage 1990) = 1994, 山田正行訳「一九九〇年新版への序言」, 『公共性の構造転換 第2版』, 未来社.
- , 1992, *Faktizität und Geltung: Beiträge zur Diskurstheorie des Rechts und des demokratischen Rechtsstaats*, Suhrkamp. = 1996, Rehg, W. (tr.), *Between Facts and Norms: Contributions to a Discourse Theory of Law and Democracy*, MIT Press.
- , 1996, *Die Einbeziehung des Anderen: Studien zur politischen Theorie*, Suhrkamp. = 1998, Cronin, C. & De Greiff, P. (ed. & tr.), *The Inclusion of the Other: Studies in Political Theory*, MIT Press.
- 花田達朗, 1993, 「公共圏と市民社会の構図」, 『岩波講座 社会科学の方法VIII システムと生活世界』, 岩波書店, pp. 41-83.
- Honneth, A., 1985, *Kritik der Macht*, Suhrkamp, = 1992, 河上倫逸監訳, 『権力の批判』, 法政大学出版局.
- 伊藤賢一, 1996, 「批判的社会理論の存立条件 — Habermas理論のbreakthrough」, 『ソシオロギス』 20号, pp. 1-16.
- ジェイ編, 1997, 竹内真澄監訳, 『ハーバーマスとアメリカ・フランクフルト学派』, 青木書店.
- Landes, J., 1988, *Women and the Public Sphere in the Age of the French Revolution*, Cornell Univ. Press.
- McCarthy, Th., 1992, “Practical Discourse: On the Relation of Morality to Politics,” in: Calhoun (ed.), *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press, pp. 51-72.
- Ryan, M. P., 1992, “Gender and Public Access: Women’s Politics in Nineteenth-Century America,” in: Calhoun (ed.), *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press, pp. 259-288.
- White, S. (ed.), 1995, *The Cambridge Companion to Habermas*, Cambridge Univ. Press.

(XXXXXXXXXX)